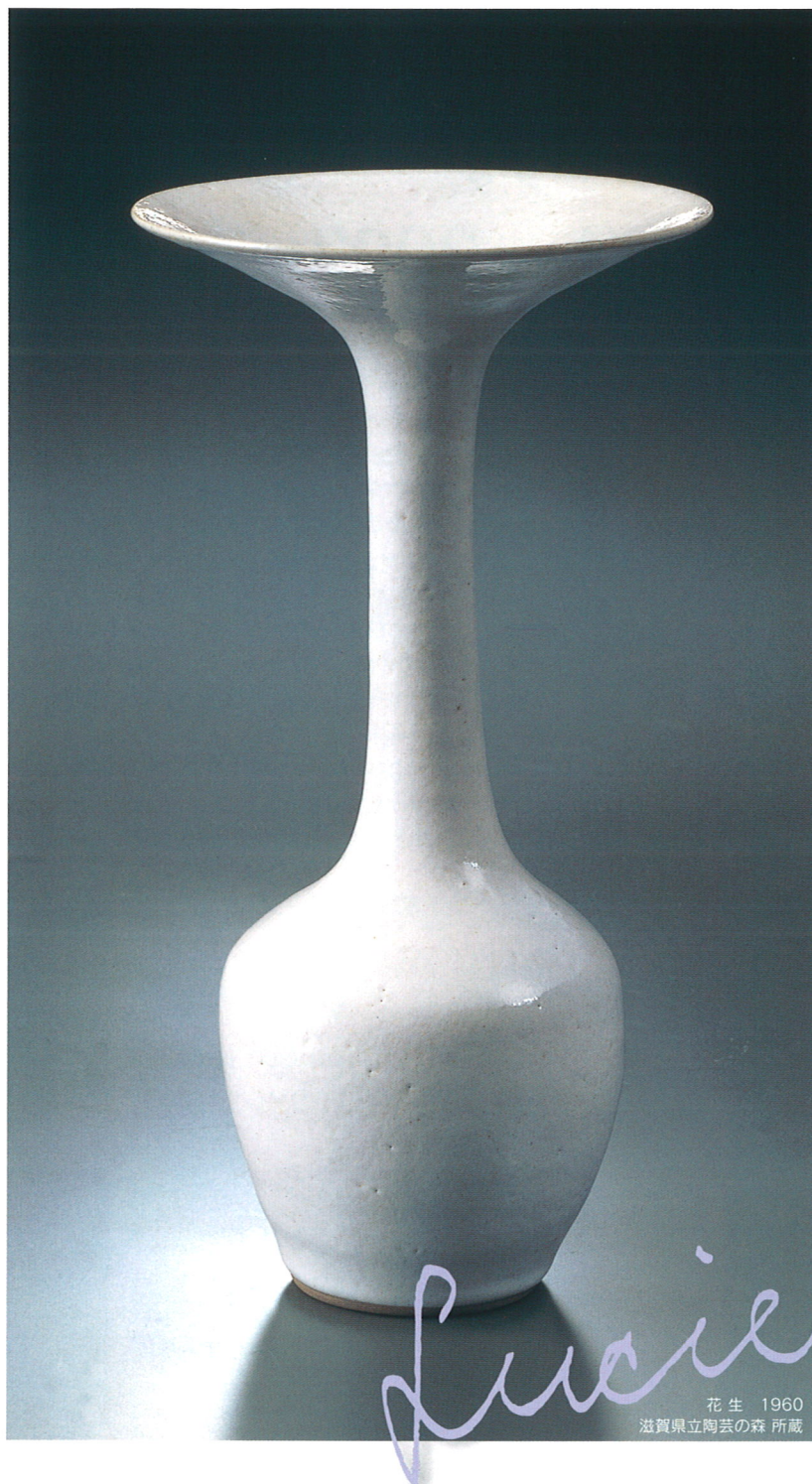




生誕100年記念

ルーシー・リー展

静寂の美へ



2002年7月7日～9月16日

開館 木曜日～日曜日 午前9:30～午後5:00 入場は午後4:45まで
7月6日(土)は展示替えのため閉館、9月16日(月・振休)は開館

会場 **MIURART** ミウラート・ヴィレッジ(三浦美術館)
愛媛県松山市堀江町1165-1 TEL089-978-6838

入場料 一般 500円 学生 400円 未就学児 無料

主催 三浦工業株式会社 共催 株式会社ミウラ

後援 The British Council 愛媛県教育委員会 松山市 サクラメント松山姉妹都市協会 愛媛新聞社
NHK松山放送局 南海放送 テレビ愛媛 あいテレビ 愛媛朝日テレビ

協賛 SHI/EIDO 財団法人花王芸術・科学財団

6月30日まで滋賀県立陶芸の森陶芸館で開催中。

生誕100年記念

静寂の美へ

ルーシー・リー展

2002年7月7日～9月16日

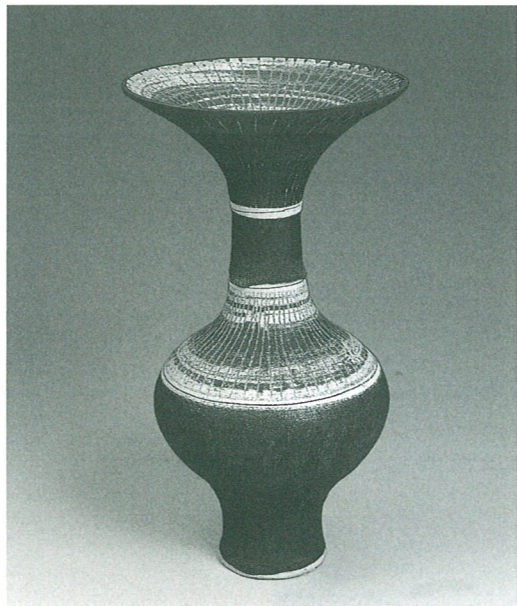
開館：木曜日、金曜日、土曜日、日曜日
7月6日(土)は展示替えのため閉館、9月16日(月・振休)は閉館

ルーシー・リーの名前は、20世紀の陶芸を語るとき、必ず登場します。

1902年ウィーンに生まれたルーシー・リーは、工業美術学校に入学した時から、1990年88歳で脳梗塞に倒れるまでの68年間、一途にロクロに向かい続けました。そして、陶芸作家として初めて、メトロポリタン美術館でハンス・コパーとの二人展を開催するなど、陶芸界に多大な影響を与えました。

30代でナチスの台頭するウィーンから、すべてを棄ててイギリスへ。しかし、イギリスへ渡ったことは、また、彼女の転機でもありました。バーナード・リーチをはじめとする陶芸家たちとの出会い、ドイツから逃れてきたハンス・コパーとの親交。「すべての新しい作品は、新たな始まりである」と語ったルーシー・リーは、困難の多い人生を送った女性でしたが、その作品は、詩情にあふれ、一期一会の喜びに満ちています。

本展は、2002年のルーシー・リー生誕100年を記念して開催されるものです。これまで日本ではあまり紹介されなかった彼女の技法にも触れながら、ウィーンでの貴重な作品を含めて、各年代の作品を網羅し、ルーシー・リーの世界に迫ります。

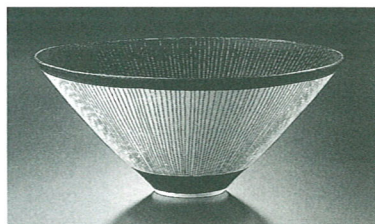


花生 1990
Collection of Sharon and Paul Dauer

繊細で鮮やかな技法の数々

ウィーン工業美術学校に入学してすぐ、彼女はロクロの「とりこになってしまった」。これがルーシー・リーが陶芸を志す、大きなきっかけだった。素焼きをせず、一度で焼成するスタイルは、高度な技術が要求されるが、粘土と釉薬が完全に溶けあい、彼女特有の濃としたフォルムを見事に引き立てている。

“掻き落とし”とは、マンガンの褐色の釉薬などを掛けた上から細かい線をつけ、下地の生地を見出す技法をいう。器の外を“象嵌”という、白い生地に針で顔料などを埋め込んでつくり、器の内と外を黒と白のネガ・ポジ風に呼吸させる手法は、彼女の繊細な装飾技術をうかがわせる。



鉢 1960
滋賀県立陶芸の森 所蔵



鉢 1960
Collection of Sharon and Paul Dauer

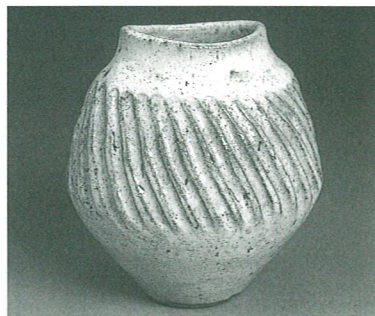
白を愛した ルーシー・リー

白の釉薬については、ルーシー・リーの偉業のひとつに数えられている。彼女ほど、白の素晴らしさを試した作家も少ない。白い釉薬といっても、少しずつ表面の色調や光沢に変化がみられる。白が好きであったというルーシー・リーのこだわりが、この釉薬の幅広いバリエーションにうかがえる。

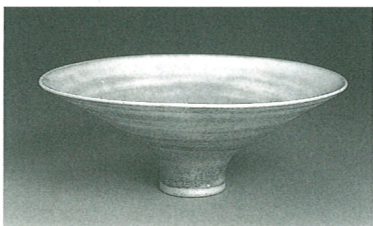
色付けた二種類以上の粘土をロクロにかけて、色の交じり合う動きのある器に仕上げた。

フルーテッド

シンプルな形態に力強く削りを入れ、それに白い釉薬をたっぷりかけたものを、フルーテッドと呼ぶ。緩やかに波を描くように彫りこまれ、よりダイナミックな動きをもつ。器のフォルムと、この削り模様の融合が、彼女らしい静かでモダンな印象を与えてくれる。



壺 1960
Collection of Sharon and Paul Dauer



鉢 1975-80
Collection of Sharon and Paul Dauer



壺 1988
Collection of Sharon and Paul Dauer

柔らかな壺の曲線に、重量感をたたえた釉薬がかけられている。彼女がこの形で見出したかったのは、釉薬と形態との融合であった。

華やかな色彩の世界

緑色、トルコブルー、黄色など、驚くほど鮮やかな色彩を鉢に施した作品は、彼女の違った印象をもたらしてくれる。これらの器は日本の茶の世界でいう茶碗を彷彿とさせるような緊張感と完成度をみせるものだ。

1970年代から1980年代にみられるもので、まわりつくよう“溶岩”釉に固まった泡が生地の色を透かし、複雑な様相をみせる。これはウィーン時代からの多くの実験の末たどりついた彼女の釉薬研究の成果であった。



鉢 1975-80
Collection of Sharon and Paul Dauer

パネル・ディスカッション 「ルーシー・リーを語る」

パネリスト：収集家・陶芸評論家 ポール・F・ダウアー
陶芸家 宮下 善爾
滋賀県立陶芸の森館長 河原 正彦

日時：7月7日 日曜日 午後2時から
会場：ミウラート・ヴィレッジ
お申し込みはミウラート・ヴィレッジへ（先着100名）



MIURART VILLAGE
MIURART

ミウラート・ヴィレッジ(三浦美術館)

〒799-2651 愛媛県松山市堀江町 1165-1
TEL 089-978-6838
FAX 089-978-0323
<http://www.miuraz.co.jp/miurart>
E-mail: fvbmb2360@mb.infoweb.ne.jp